



ヘーベルハウス  
2.5世帯ものがたり  
～第2話～

# 姉の圧縮と現金な願い。

姉の援助はいかほどだろうか？

実家が近づくにつれ、僕の由紀子姉さんへの願いは、さらに現金なほうへ向かっていた。両親と姉と僕の家族で同居する「2.5世帯」。その提案に賛成してくれたら、姉はいくら資金協力してくれるだろう？派遣社員ながら、三十八歳という異例の若さ（本人談）で食品会社のプロジェクトリーダー的存在に最も近いと一目置かれていたらしい姉。三十八歳には見えない美貌（本人談）で飲み会でも人気者らしい姉。実家暮らしだし、貯えはあるはずだ。…って僕は何を打算してるんだ。まずは前向きな同意を得ることだろ。「いい？パパが毎日お皿洗い、ゴミ出し、ママのお肩もみしてるよ。おじいちゃんたちに言っちゃだめよ」「はーい」妻は後部座席の子どもたちと入念な約束ごとをしていた。実家に着くと、姉は玄関の外で私たちを出迎えてくれた。「翔太も、春香も、大きくなったね〜」ギュッと抱きしめられる子どもたち。この人はいつも甥と姪をわが子のように可愛がってくれる。姉さん、この家を「ヘーベルハウスの2.5世帯住宅」に建て直さないか？大好きなこの子たちといつでも遊べるんだぜ。両親の心配だって一人で抱え込まなくていい。それにローンなら共働きの俺ら夫婦で組むし。姉は少々、もといそこそこ、やっぱりそれなりに、頭金か家賃を援助してくれば充分だから。2.5世帯ではそういう協力の仕方が一般的らしいよ。そんなことを考えている間に、姉と子どもたちが、手をつなぎながら実家へ入っていく。「いくつになったの〜？」と姉。「六さい〜」「よっつ〜」「ゆきごおばちゃんはっ」「由紀子おネエさんは三十ちよいかな〜」くだいようだが、姉は三十八である。八年という長い歳月を「ちよい」のひと言に圧縮したが、子どもにウソはついていない。

（明日予定の広告紙面に）つづ〜

## 2.5世帯住宅で、暮らしませんか？

考えよう。答はある。

ヘーベルハウス